水遠の真理

LTRUTH

キリストを通しての

完全な従順

2011年1月

「わたしたちの創造主にして救い主」「答られた疑問」(VII) 「豆腐ローフ」「怠け癖の奴隷」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

「キリストを通しての完全な従順」

4

朝のマナ

「わたしたちの創造主にして救い主」

神のみかたちを回復する

7

現代の真理

「答えられた疑問」(VII)

印する働き

39

力を得るための食事

「豆腐ローフ」

44

お話コーナー

「怠け癖の奴隷」

46

教会

【正丸教会】

〒 368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1 電話: 0494-22-0465

電話: 0494-22-0465 FAX: 0494-26-5059

【高知集会所】

〒 780-8015 高知市百石町 1-17-2 電話: 0887-58-3263

【沖縄集会所】

〒 905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21 電話: 0980-55-8136

アクシフ

ホームページ:http://www.4angels.jp メール:support@4angels.jp

発行日 2010 年 12 月 31 日 編集&発行 SDA 改革運動日本ミッション 〒 368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

イラスト: dreamstime.com p.2, 45; Sermonview p.1, 7

キリストの訓練のもとに

キリストの訓練のもとに、弟子たちは聖霊を必要と感じるように導かれていた。聖霊の教えにより、彼らは最終的な資格を受けて、彼らの生涯をかけた仕事に出て行った。もはや彼らは無学ではなく、無教養でもなかった。もはや彼らはてんでんばらばらな一団ではなく、また、不調和で矛盾した分子の寄り集まりでもなかった。もはや彼らの望みは、世的な成功を目指すものではなかった。彼らは「心を一つにし思いを一つにして」いた(使徒行伝 2:46,4:32)。キリストが彼らの思想となり、キリストの国の前進が彼らの目標であった。彼らは心も品性も主に似たものとなっていた。そして人々は「彼らがイエスと共にいた者であることを認め」た(使徒行伝 4:13)。

ペンテコステは彼らに天の啓示をさずけた。キリストと 共にいたときには理解できなかった真理が、いま明らかにされた。 彼らはこれまで知らなかった信仰と確信を与えられて、聖なるみことばについての教えを受け入れた。キリストが神のみ子であるということ は、もはや彼らにとって信仰の問題ではなかった。主が、たとえ人間性を身につけておられても、本当に、メシヤであられることを彼らは知っていた。そして、神が彼らと共におられるのだという確信をもって、世に自分たちの経験を堂々と語った。

弟子たちはイエスのみ名を、確信をもって語ることができた。それは、イエスが彼らの友であり、兄であられたからではなかっただろうか。キリストとの親しい交わりに導かれて、彼らは主と共に天に備えられた場所に座った。キリストをあかしするとき、弟子たちの思想を包んだのは、すさまじく燃えることばであった。弟子たちの心には豊かな深い愛、どこまでも広い慈愛が積みすぎるほど積みこまれていたため、キリストのみ力をあかししに、地の果てまでも行かずにはおられなかった。弟子たちは、キリストが始められたみ働きを進展させたいという、切なる願いでいっぱいであった。彼らはまた、神の恩義の大きさと、彼らの仕事の責任の大きさを悟った。聖霊の賜物に力づけられて、彼らは、十字架の勝利を更にひろげたいという熱意に燃えて出て行った。聖霊は彼らを活気づけ、彼らを通して語った。キリストの平和が彼らの顔から輝き出た。彼らの生涯を奉仕のために主にささげていたので、その顔には神にゆだねきった表情があらわれていた。患難から栄光へ下巻 41,42

キリストを通しての完全な従順

「これでわかるように、人が義とされるのは、行いによるのであって、信 仰だけによるのではない。……霊魂のないからだが死んだものであると同様 に、行いのない信仰も死んだものなのである」(ヤコブ 2:24 ~ 26)。 イエス を信じる信仰を持ち、このお方を通して救われると信じることは重要不可欠 である。しかし、多くの人がするように、「わたしは救われている」という立 場を取ることは危険である。多くの人々は、「あなたは良い行いをしなければ ならない。そうすれば生きるでしょう」と言ってきた。しかし、キリストから 離れては、だれも良い行いをすることはできない。今の時代、多くの人々が 「信じなさい、ただ信じなさい。そうすれば生きます」と言う。信仰と行いは 共に行き、信じることと行うことは混じり合っている。主はアダムが堕落する 前に、パラダイスにおいて彼に要求したこと一完全な従順、傷のない義一を、 今もまったく同様に要求なさる。恵みの契約の下における神のご要求はこの お方がパラダイスで要求されたこととちょうど同じように広いもの一聖にして、 正しく、善なる神の律法との調和一である。福音は律法の要求を弱めはしな い。それは律法を高め、誉れあるものとする。新約の下でも、旧約の下で要 求されたのとまったく同様のことが要求されている。だれひとりとして、生来 の心に非常に心地よい錯覚、すなわち信仰がどうであろうと、生活がどれほ ど不完全であろうと、神は真心をお受入れになるという錯覚に夢中になって はならない。神はご自分の子らに完全な従順を要求なさる。

律法の要求に応じるために、わたしたちの信仰は、キリストの義をわたしたちの義として受け入れ、それをつかまなければならない。キリストとの結合を通して、すなわち信仰によるこのお方の義の受け入れを通して、わたしたちは神のわざを行い、キリストとの共労者となるのにふさわしくされる。もしわたしたちが悪の潮流にのって流されることを望むなら、そして永遠の義を持ちきたることができるように、自分の家庭や教会の中で不法を抑制する天の代理者と協力しないなら、あなたには信仰がないのである。信仰は愛によって働き、魂を清める。信仰を通して、内に聖潔を創造するために、心に働く。しかし、これは人間の代理人がキリストと共に働かない限りなされ得ない。わたしたちは聖霊が心になす働きを通してのみ、天にふさわしい者とされることができる。なぜなら、わたしたちが御父の許へ行く道を見出したいのであ

れば、キリストの義を自分の信任状として持たなければならないからである。 わたしたちがキリストの義を持つことができるためには、日ごとに聖霊の感化力によって変えられ、神性にあずかる者とされる必要がある。趣味を高め、心を聖化し、全人格を高尚にするのは、聖霊の働きである。

イエスを見る

魂にイエスを見させなさい。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ1:29)。だれもイエスを見るように強制されることはないが、招きの声は、切望する嘆願となって鳴り響いている。「見て、生きよ」。キリストを見ることによって、わたしたちは比類のないこのお方の愛を、そして、このお方が罪深い罪人の立場に替わり、ご自分のしみのない義を彼に着せて下さったことを見る。自分の救い主が、自分の代わりに罪ののろいの下で十字架上で死につつあるのを罪人が見て、その許しの愛をながめるとき、愛が彼の心の中に目覚める。罪人はキリストを愛する。なぜなら、キリストがはじめに彼を愛して下さったからである。そして愛は律法を成就するのである。悔い改めた魂は、神が「真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」ことを悟る。神の御霊は信じる人の魂の中で働き、彼をある領域での従順から次へと進み、力からより大きな力へ、イエス・キリストにおける恵みから恵みへ到達できるようにさせる。

神はキリストを自分の個人的な救い主としないすべての者を正当に有罪となさる。しかし、このお方は信仰のうちにご自分の許に来るすべての魂をお許しになり、神のわざをなすことができるように、そして信仰を通してキリストと一つとなることができるようにして下さる。イエスは、これらの人々について次のように仰せになる、「わたしが彼らにおり、あなたがわたしにいますのは、彼らが完全に一つとなるためであり(この結合が品性の完全をもたらす)、また、あなたがわたしをつかわし、わたしを愛されたように、彼らをお愛しになったことを、世が知るためであります」(ヨハネ17:23)。主は人が完全で無償の救いを得、ご自分のうちに完全になることができるように、すべての備えをしてこられた。神はすべての人が真理の光を持つことができるように、ご自分の子らが義の太陽の明るい光線を持つよう図っておられる。神は無限の代価、すなわちご自分のひとり子という賜物を通してでさえ、世のために救いを備えてこられた。使徒は「ご自身の御子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、御子のみならず万物をも賜

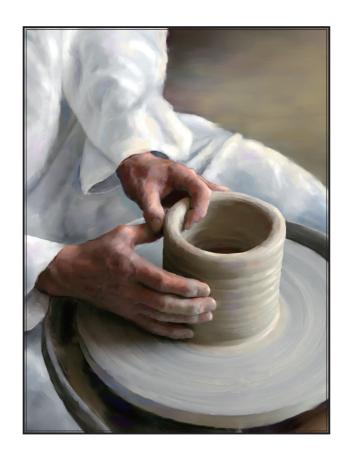
わらないことがあろうか」と問うている(ローマ 8:32)。ということは、もしわたしたちが救われないとすれば、責任は神の側ではなく、わたしたちの側にあるのであって、神聖な代理人と共に協力してこなかったためである。わたしたちの意志が神の意志に一致しなかったためである。

世の贖い主は、ご自分の神性に人性をまとわれた。それはご自分が人性 に手を差し伸べることができるためであった。なぜなら、堕落した人類に必 要な救いを世にもたらすためには、神性と人性が必要とされていたからであ る。人性が神と人との間の交信の経路を得ることができるために、神性は人 性を必要とした。人は神のみかたちに回復されるために、外からのそして上 からの力を必要としている。しかし、彼が神聖な助けを必要としているから といって、人間の活動がなくてもよいのではない。人間の側の信仰が要求さ れる。なぜなら、信仰は愛によって働き、魂を清めるからである。信仰はキ リストの徳をつかむ。主は人間の力が麻痺するようにとは意図しておられな い。そうではなく、神と協力することによって、人間の力は善をなすのに効果 的になる。神はわたしたちの意志が破壊されるようにとは意図しておられな い。なぜなら、まさにこの特質を通してこそ、内外の両方で主がわたしたち にさせようと望んでおられる働きを成し遂げるからである。このお方はすべて の人にその人の仕事を与えてこられた。そしてすべての真の働き人は世に光を 降り注ぐ。なぜなら、彼はこの失われた者を救うという壮大な働きにおいて、 神とキリストと天使たちと結合しているからである。神聖な交わりにより、彼 はますます神の働きをなすのに知的になる。神の恵みが内に働いていること を外に働くことにより、信徒は霊的に偉大になる。自分に与えられた能力に 従って働く人は、主人なるお方のために賢明な建設者となる。なぜなら、彼 はキリストに学ぶ師弟関係の下におり、神のみわざをなすことを学ぶからであ る。彼は責任の重荷を避けない。なぜなら、彼は各々自分の能力の及ぶ範 囲で、神のみ事業において引き受けなければならないことを自覚しているか らである。そして彼はみ働きの重荷を自ら負う。しかし、キリストはご自分の 自発的で従順なしもべが押しつぶされるがままに放っておかれはしない。あ なたが哀れまなければならないのは、神のみ事業で重い責任を担っている人 ではない。なぜなら、彼は神との協力において忠実で真実だからである。そ して神と人の協力の結合を通して、働きは完成される。哀れみの対象となる のは、責任を避け、自分が召されている特権を自覚しない人である。

引用参考文献: セレクテッド・メッセージ1巻373~376 59章

神のみかたちを回復する

Restoring the Image of God



1月 「わたしたちの創造主にして救い主」

キリストと創造

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。すべてのものは、彼によってできた。できたもののうち、一つとして彼によらないものはなかった。」(ヨハネ1:1~3 英語訳)

万物は神の御子によって創造された。(レピュー・アンド・ヘラルド 1910 年 8 月 18 日)

この地球がキリストによって創造されたとき、神聖で美しかった。神はそれを「はなはだ良」いと仰せになった(創世記 1:31)。一つ一つの花、潅木、木が自分たちの創造主のご目的に応えた。(パイプル・エコー 1900 年 5 月 21 日)

主イエスは天地にある事物の造り主であり、ご自身の真理の解説者であられたので、神の栄光の光を反映するようにと、自然にお命じになった。空飛ぶ小鳥、野にある草花、森の木々、実りの多い畑、不毛の地、鎌を入れるばかりになった穀物、実のならない木、日の出と日の入り、種まき、産物の取り入れ、一すべては神の真理の象徴として用いられている。このお方は創造主の目に見える働きと命のみ言葉を結び合わせ、人の思いを自然から自然を造られた神へとお向けになる。一つ一つのつつましやかな潅木、繊細な草花は神の愛の心の証を担う。もし目が閉じていなければ、もし耳が鈍くなっていなければ、もし心が神の御霊の印象を受けるために開いているなら、自然は、自然と霊の調和を語る。キリストは、自然界から引き出される実例を通じて、非常に重要な教訓を魂に教えてこられた。であるから、このお方がご自分の教訓に結びつけられた対象を熟考するかたわら、そのみ言葉を考えることにより、神聖な重要性がさらに思いに明らかになる。(サインズ・オプ・ザ・ザ・タイムズ1892年10月24日)

神は、イエス・キリストによって一香や、何かつかみどころのないものでなく、 個性を持っておられる神は一人を創造し、彼に知性と権威をお授けになった。 (今日神と共に 273)

過ちによってかたくなにならず、偽りの理論によって歪められていない心一誠実に何が真理であるかを知りたいと願う心は、キリストが魂にもたらすメッセージを喜んで受け入れる。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ1892年10月24日)

神のかたちに造られた

「神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。」(創世記 1:27)

地は創造主のみ手により非常に美しく現れた。山々、丘、平原があり、それらの間に川や湖水が点在していた。地は一つの広大な平原ではなく、丘や山々は今のように高く荒削りでなく、調和が取れた美しい形で、景色の単調さは破られていた。むき出しの高い岩は見られず、地の骨組みとしての役割を果たし、表面の下に敷かれていた。多量の水は規則正しく分散していた。丘、山々、平原は草木や花々で飾られ、今の木々よりも何倍も高くはるかに美しい、あらゆる種類の高い堂々たる木々で飾られていた。空気は清らかで健康的であり、地は気高い宮殿のように見えた。天使たちは神の素晴らしい、美しいみ業を眺めて喜んだ。

地が創造され、獣がそこに創造された後、御父と御子はサタンの堕落の前に計画しておられた、ご自身の形にかたどって人を造るという目的を実現された。御父と御子は地とその上に住む生き物をことごとく創造するにあたって共に働かれた。そして今神は御子に「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造」ろうと仰せになる(創世記1:26)。アダムが創造主のみ手によって現れたとき、彼は背が高く、みごとに均整が取れていた。彼は今地上に生きている人々の二倍以上の背丈があり、よく釣り合いが取れていた。彼の顔立ちは完全であり美しかった。顔色は白くも黄ばんだ色でもなく、血色の良い健康にあふれた顔色であった。エバはアダムほど背は高くなく、彼女の頭は彼の肩より少し上であった。彼女も気高く一完全に均整が取れており、非常に美しかった。

この罪のない夫婦は手で作った衣服を着ていなかった。彼らは天使が着るような、光と栄光の衣をまとっていた。(預言の霊 1 巻 24, 25)

美しい園の家庭

「主なる神は東のかた、エデンに一つの園を設けて、その造った人をそこに置かれた。」(創世記 2:8)

神が造られた一つ一つが美の極みであり、神がアダムとエバを幸福にするために創造された地上に何も欠けているようには見えなかったけれども、このお方は彼らのために特別に園に植物を植えることで彼らに対するご自分の大いなる愛を表された。彼らの時間の一部分は園を整える幸福な仕事に、一部は天使の訪問を受けて、彼らの教えに耳を傾けるために、幸福な瞑想に当てられるべきであった。彼らの労働は疲れさせるものではなく、楽しい元気づけるものであった。この美しい園は彼らの家庭、彼らの特別な住まいとなるべきであった。

主はこの園の中に有用性と美しさのためにあらゆる種類の木々を配置された。そこには香り豊かで、目に美しく、おいしい、神が聖なる夫婦の食物となるように計画された、よく育った果物がたわわになっている木々があった。そこには、堕落以来だれも見たことのないような、実の房をたわわにつけ、まっすぐに伸びているぶどうの木があった。その実は非常に大きく、さまざまな色であり、あるものはほとんど黒に近く、あるものは紫、赤、ピンク、薄緑であった。ぶどうの枝についている美しくよく育った実はぶどうと呼ばれた。それらは地面を這わず、蔓(つる)棚で支えられなくても実の重みで垂れ下がることはなかった。香り高い実をたわわにつけた、自然の美しい生きた木々と葉で住まいを形づくりつつ、ぶどうの枝を仕立て、美しい木陰の休息所をつくることはアダムとエバにとって幸せな働きであった。

あらゆる種類と色合いの香りたかい無数の草花が、あちこちにあふれるばかりに生えている一方で、地は美しい新緑で装われていた。なにもかも趣(おもむき)があり、燦然と配列されていた。園の中央には他のすべての木にまさって栄光に輝く命の木が立っていた。その実は金と銀の混じったりんごのように見え、不死を永続させるためのものであった。(預言の霊1巻25,26)

楽しい生活

「〔あなたは〕ただ少しく人を神(天使)よりも低く造って、栄えと誉とをこうむらせ、これにみ手のわざを治めさせ、よろずの物をその足の下におかれました。」(詩篇 8:5, 6)

エデンにいる聖なる夫婦は非常に幸せであった。彼らにはあらゆる生き物への無限の支配権が与えられた。ライオンと小羊は彼らの周りで平和に無邪気に戯れ、あるいは彼らの足元でまどろんだ。あらゆる色と羽の小鳥たちが木々や草花の間またアダムとエバの周りを飛びまわり、彼らのやわらかく美しい音色の快い響きは、創造主をたたえて美しい調和のうちに木々の間をこだました。

アダムとエバは彼らのエデンにある家庭の美しさに魅了された。彼らは自分たちの周りにいて、輝く優美な羽根をまとい、幸福な快い音楽をさえずり続けている小さな歌い手を喜んだ。聖なる夫婦は小鳥たちと一緒に、自分たちを取り囲む愛のしるしのゆえに、御父とこのお方の愛する御子への愛と賛美と崇拝の調和の取れた歌に彼らの声をあげ、小鳥たちと和した。彼らは無限の知恵と知識を語る創造の秩序と調和を認めた。彼らは、エデンの家庭の何か新しい美しさとさらなる栄光を絶えず発見し、それらは彼らの心を深い愛で満たし、彼らの唇から創造主への感謝と崇敬の表れが出た。(預言の霊1巻 26, 27)

アダムには、天の小模型であるエデンにおいて神のみ働きにおける計画のための主題があった。神は、人がご自分の栄光に満ちたみ働きを単に熟考するために形づくられたのではなかった。それゆえこのお方は彼に熟考のための思いと心と同様働くための手をお与えになった。もし人の幸福が何もしないことにあるなら、創造主はアダムに定まった働きをお与えにはならなかった。人は瞑想と同様、労働にも幸福を見出すべきであった。(レピュー・アンド・ヘラルド 1874 年 2 月 24 日)

最初の両親のエデンの家庭を並外れて麗しく造られた神は、わたしたちの幸福のために、威厳のある木々、美しい草花、自然界にあるあらゆる麗しいものもまた与えておられる。(健康改革者 1871 年 7 月 1 日)

自然界の神秘を喜ぶ

「あなたは知っているか、雲のつりあいと、知識の全き者のくすしきみわざ を。」(ヨブ 37:16)

聖なる夫婦は神の父としての保護を受ける子供たちであるばかりでなくて、 知恵にみちた創造主から教えを受ける生徒でもあった。彼らは天使たちの來 訪を受け、何の隔てもなく、創造主と交わることを許された。彼らは命の木 によって与えられた生気に満ち、彼らの知力は天使よりわずかに劣るだけで あった。目に見る宇宙の神秘一「知識の全き者のくすしきみわざ」一は彼ら にとって尽きない教えと喜びの泉であった(ヨブ37:16)。過去六千年の間、 人間が研究を続けてきた自然の法則と作用は、万物の創造者であり、維持 者である無限のお方によって、彼らの思いに開かれた。彼らは木の葉、草花、 樹木と語り、それぞれの命の神秘を学んだ。アダムはあらゆる生物、水中に 遊ぶ巨大な海魚から日光の中にいる小さな昆虫にいたるまで、被造物を熟知 していた。彼はおのおのに名を与え、すべてのものの性質と習慣によく通じ ていた。もろもろの天の神の栄光、整然と運行する無数の世界、「雲のつり あい」(ヨブ 37:16)、光と音、昼夜の神秘などのすべては、われわれの初め の両親の研究の課題であった。森林のあらゆる葉に、山々の岩石に、すべ ての輝く星に、大地に、大気に、大空に、神のみ名が記されていた。造ら れた世界の秩序と調和は、無限の知恵と力とを彼らに語った。彼らは自分た ちを強くひきつけ、彼らの心を深い愛で満たし、新たな感謝の声をあげさせ るものを常に発見するのであった。

彼らが神の律法に忠誠を尽くしているかぎり、知って、理解を深め、愛する彼らの能力は絶えず啓発されるのであった。彼らは常に新しい知識の宝庫を手に入れ、新しい幸福の泉を発見し、神のはかり知れない不滅の愛について、ますます明瞭な観念をいだくようになるのであった。(人類のあけぼの上巻 26, 27)

本来の実質的な教室

「〔アダムとエバは〕日の涼しい風の吹くころ、園の中に主なる神の歩まれる音を聞いた。(創世記 3:8)

天地が創造された時に定められた教育制度は、後世にいたるまで、人類の模範となるべきものであった。その原則を実地に示すものとして、人類の始祖の故郷であるエデンにモデル・スクールが設けられた。エデンの園が教室であり、自然が教科書であり、創造主ご自身が教師であり、人類家族の両親であるアダムとエバが生徒であった。

「神のみかたちと栄光」として創造されたアダムとエバは、そのとうとい身分にふさわしい才能をさずけられていた(コリント第一11:7)。優美で均整のとれた肢体、美しくととのった容貌、健康と喜びと希望にかがやく顔色、彼らのそうした外観は、創造主のみかたちに似ていた。このように似かよった点は、ただ肉体の面ばかりではなかった。知能と魂のあらゆる面に、創造主の栄光が反映していた。アダムとエバは、「御使いたちよりも低」くつくられ(ヘブル2:7)、高い知的および霊的な賜物を授けられていた。それは、彼らが目に見える宇宙の神秘を認識するばかりでなく、また霊的な責任と義務を理解することができるように与えられたのであった。……

ご自分の子らに関心をおよせになる父なる神は、自ら彼らの教育を指導された。聖天使たちは、神の使者として、たびたび彼らを訪れては、神の教訓と勧告を伝えた。日の涼しいころ、アダムとエバが園の中を歩いていると、よく神のみ声がきこえてきた。こうして彼らは、永遠の神と顔をあわせて交わりを続けた。彼らに対する神の思いは、「災を与えようというのではなく、平安を与えよう」(エレミヤ 29:11)との思いであった。神のみこころの一つつは、彼らの最高の幸福ということにあった。……

自然界の法則と営み、また霊界を支配する真理の大原則は、万物の創造主であり限りない存在であられる神によって、彼らの心に示された。……彼らは、自分たちの神聖な存在に、最高の歓喜をおぼえた。(教育 $10 \sim 12$)

すべての時代のための模範学校

「しかし獣に問うてみよ、それはあなたに教える。空の鳥に問うてみよ、それはあなたに告げる。あるいは地の草や木に問うてみよ、彼らはあなたに教える。海の魚もまたあなたに示す。これらすべてのもののうち、いずれか主の手がこれをなしたことを知らぬ者があろうか。すべての生き物の命、およびすべての人の息は彼の手のうちにある。」(ヨブ 12:7-10)

「神は自分のかたちに人を創造された」(創世記 1:27) としるされている。神の御目的は、人が長く生きれば生きるほど、ますます、はっきりと神のみかたちをあらわすこと、すなわちなおいっそう明らかに創造主の栄光を反映することであった。人間のあらゆる才能は発達することが可能であって、それらの才能の能力と活力はたえず増大することになっていた。そうした才能を働かせるために、広い機会が与えられ、研究のために輝かしい分野が開かれていた。目に見える宇宙の神秘、すなわち、「知識の全き者のくすしきみわざ」(ヨブ 37:16) が人の研究を招いていた。創造主と顔をあわせて、心と心の交わりをすることが、アダムのとうとい特権であった。もし彼が、神への忠誠心を変えなかったなら、この特権は、永久に彼のものとなったであろう。彼は、永遠にわたってたえず知識の新しい宝を手に入れ、幸福の新しい泉を見いだし、神の知恵と力と愛についていよいよ明らかな概念を持ちつづけたであろう。(教育 4)

エデンの園は、全地をこのようにしたいという神のご希望のあらわれであった。人類家族の数がふえるにしたがって、エデンの園で神からあたえられたのとおなじような他の家庭や学校を設けるようにというのが神のみこころであった。こうして全地は、時がたつにつれて、神のみ言葉とみわざを学ぶ家庭や学校で満たされ、生徒たちは、永遠にわたって、神の栄光を知る光を、ますます深く反映するのにふさわしい者となるはずであった。(教育 12)

エデンにおいて確立された教育の制度は、家族を中心とするものであった。 アダムは「神の子」であった (ルカ 3:38)。神の子らは、父なる神から教えを うけた。彼らの学校は、真の意味において、家庭学校であった。(教育 26)

エデンでの待ち遠しい日

「神はその第七日を祝福して、これを聖別された。神がこの日に、そのすべての創造のわざを終って休まれたからである。」(創世記 2:3)

エデンで設けられた安息日の制度は、世界の誕生と共に古い。(人類のあけぼの上巻 397)

第四条はその起源を創造のときに置く。創造主の休息の日は聖なるエデンでアダムによって聖別された。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ1884 年 2 月 24 日)

もし人が常に安息日を守っていたなら、世に不信心者、無信仰者、無神論者は決していなかったことであろう。もしアダムとエバが、世を創造することにおける神のみ働きを熟考していたなら、もし彼らが、神が彼らに安息日をお与えになった理由をよく考えていたなら、もし彼らの幸福のために加えることのできるものは何一つ差し控えずに与えて下さった美しいしるしを彼らが眺めていたなら、彼らは安全であり、自分たちに対するこのお方のいつくしみと愛のゆえに、このお方をあがめ、神に非難を浴びせるサタンの詭弁に耳を傾ける代わりに、神のみ手のわざに注意を払い、快い調べ、感謝、ほめたたえる賛美が彼らの口からほとばしりでていたであろうに。もし彼らが、神が自分たちをどれほどご自分のあふれるばかりの愛の対象としておられたかをよく考えていたなら、堕落することはなかったのである。しかし彼らは神のご臨在を忘れた。彼らは、み使いたちがあらゆる危険から彼らを守るために、彼らの周りを取り囲んでいることを忘れ、大いなる恩人であるお方から目をそらした。

安息日は現代へのテストである。霊とまこととによって第四条の戒めに従うことで、人々は十戒の教訓すべてに従う。この戒めを成就するために、人は神を最高に愛し、このお方が造られたすべての被造物に愛を働かせなければならない。主はわたしたちに「安息日を覚えて、これを聖とせよ」と熱心にお勧めになる(出エジプト 20:11)。そしてこれが主の訓告なのであるから、わたしたちがこの戒めを彼らの記憶に思い起こさせることによって彼らをうんざりさせると、だれかわたしたちを責める者があるであろうか。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1896 年 2 月 13 日)

道徳上の品性のテスト

「主なる神はその人に命じて言われた、「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」。(創世記 2:16,17)

人類の始祖アダムとエバは、罪のない聖なる者につくられたが、絶対に悪いことができないようにはつくられなかった。神は、彼らをご自身の要求にそむく能力のない者におつくりになることもできたであろう。しかし、もしそうであったなら、品性の向上はあり得ず、彼らの奉仕は自発的でなく、強制的なものとなったであろう。そこで神は、彼らに、選択の能力すなわち服従するかあるいは服従を拒むか、そのどちらでもできる能力をお与えになったのである。そして彼らは、神が彼らに与えようと望んでおられる祝福をもれなく受けるに先だって、まずその愛と忠誠心を試みられなければならなかった。……

神のみこころは、アダムとエバが悪を知らないようにということであった。 善の知識は惜しみなく彼らに与えられていたが、悪の知識すなわち罪とその 結果である苦労、煩悶、失望、悲嘆、苦痛、死といったようなことは、愛の ゆえに、彼らに知らされずにいた。(教育 14)

主は人に恩恵期間をお与えになったが、それは彼が自分自身の幸福のために、また創造主の栄光のために、堅固な正直さの品性を形づくることができるためであった。このお方はアダムにご自分が造られた他のどの被造物にもまさった思いの力をお授けになっていた。彼の精神力は天使よりも少し低いだけであった。……

アダムに与えられた最初の道徳上の教訓は自己否定の教訓であった。自己統治の手綱は彼の手の内にあった。判断、理性、良心が支配すべきであった。……

アダムとエバは一つを除いて園にあるどの木からも取って食べることを許されていた。一つの禁止があった。禁断の木は園にある他の木々と同じように魅力的で美しかった。それは神が「取って食べてはならない」と仰せになったその木の実を食べると罪の知識と不従順の経験を持つので、知識の木と呼ばれた(創世記 2:17)。(コンフロンテイション 12)

邪悪な陰謀が始まる

「さて主なる神が造られた野の生き物のうちで、へびが最も狡猾であった。 へびは女に言った、「園にあるどの木からも取って食べるなと、ほんとうに神が 言われたのですか。」(創世記 3:1)

エバは草花の色や香りで感覚を楽しませ、木々や茂みの美しさに感嘆しながら、夫のそばから離れて行った。彼女は、神が知識の木に関して、自分たちの上に置かれた制限のことを考えていた。エバは、あらゆる必要を満足させるために主が備えてくださった美しいものと恵み深さを喜んだ。これらすべては楽しむようにと神がわたしたちに与えてくださった、と彼女は言った。それらはすべてわたしたちのものである。なぜなら神が「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない」と仰せになったのだから(創世記 2:16,17)。

エバは禁じられた木の近くを歩き回っていた。そして死がこのきれいな木の実の中にどのように隠れていることができるのかを知りたいという好奇心が起こった。彼女は、見知らぬ声が自分の疑問を取り上げ、くりかえしたのを聞いて驚いた。「園にあるどの木からも取って食べるなと、ほんとうに神が言われたのですか」(創世記 3:1)。

エバは、自分と聞こえるように話している中に、自分の考えが表されていることに気づかなかった。それゆえ、自分の疑問がへびによって繰り返されるのを聞いて非常に驚き、そのへびには彼女の考えていることが分かるので、非常に賢いに違いないと、本当に思った。(コンフロンテイション 12, 13)

わたしたちは常に誘惑から来る考えを妨げることはできないが、それらを 口に出さないように、敵に抵抗することはできる。魂の敵は人々の考えを読 み取ることは許されていないが、彼は鋭敏な観察者であり、言葉と行動に注 意し、それに応じて自分の誘惑を上手に適合させる。……

ああ、一瞬間でも幕が分かたれ、全天が人類に抱いている関心をあなたが見ることができるなら!神と天のみ使いたちは、わたしたちが自分自身を全ての罪から清めるつもりがないのかどうかを見ようと熱心に待っている。(ヒストリカル・スケッチ 146)

一歩一歩巧みな計略

「なぜ疑ったのか。」(マタイ 14:31)

もう二度と神の恵みにあずかる可能性がなくなったことをはっきりとサタンが知ったとき、彼の悪意と憎しみが現われ始めた。彼は、彼の天使たちと謀って、なおも、神の統治に反抗する計画を立てた。アダムとエバが、美しい園におかれたときに、サタンは、彼らを滅ぼす計画を立てていた。この幸福な夫婦は、神に従ってさえおれば、その幸福を奪われることはありえなかった。彼らがまず神にそむき、神の恵みを失うのでなければ、サタンは、彼らに働きかけることはできなかった。であるから、彼らを不服従に導き、彼らが神の不興を招いて、サタンと彼の天使たちの直接の影響のもとに陥るような計画をたてなければならなかった。サタンが姿を変えて、人間に対する関心を示すようにすることが決定された。彼は、遠回しに神の真実性を否定し、神が言われたことが真実であるかどうかを疑わせなければならなかった。次に、彼らの好奇心を起こさせて、神のはかり知ることができない計画をせんさくさせなければならなかった。これは、サタン自身が犯した罪そのものであった。そして、神はなぜ善悪を知る木について禁令を発せられたのかを、彼らに考えさせなければならなかった。(初代文集 256, 257)

〔サタンは〕やわらかい、快い言葉で、音楽のような声で、不思議に思っているエバに話しかけた。彼女はへびが話すのを聞くことにびっくりした。彼は彼女の美しさと非常な素晴らしさを誉めそやし、それは彼女にとって不快ではなかった。しかし彼女はびっくりした。なぜなら神はへびに話す力を与えてはおられないことを彼女は知っていたからである。

エバの好奇心が起こり、その場所から逃げる代わりに、彼女はへびが語ることに耳を傾けた。それがへびを媒介として用いている堕落した敵に違いないということが、彼女の思いには起こらなかった。話したのはへびではなく、サタンであった。エバはだまされ、へつらわれ、惑わされた。彼女が天使のような姿をして、天使と同じように見える、威厳のある人に会ったのであれば、警戒したことであろう。しかし、その聞きなれない声を聞いて、彼女は知らない者がなぜこのように気安く自分に話しかけるかを問うために、自分の夫の許へ急いで戻るべきであった。しかし彼女はへびと論じ始める。彼女は彼の質問に答える。(預言の霊 1 巻 36)

欺瞞的な戦略を避ける

「悪をたくらむ者の心には欺きがあり、善をはかる人には喜びがある。」(箴言 12:20)

エバがこの誘惑者と言葉をかわしさえしなかったら、彼女は安全であっただろう。だが彼女は、サタンにかかわり合ったために、彼の策略に落ちてしまった。今でも多くの者が打ち負かされるのは、このようにしてである。彼らは、神のご要求について疑いを抱き、議論する。彼らは、神のご命令に従わないで人間の説を受け入れるが、それは、偽装されたサタンの策略にすぎない。(各時代の大争闘下巻 278)

サタンは大欺瞞者である。わたしたちにとって彼の誘惑を受け入れることは、実現し得るどのような地上の損失よりも、しかり、死そのものよりも悪い。サタンの意志と計画への服従という恐るべき代価を払って成功を得る者は、自分が損害を与える取引をしたことに気づく。サタンとの取引は、何であっても高い代価を払うことになる。彼の示す利益は、蜃気楼である。彼が差し出す高い希望は、立派で気高く純潔なものを失うことによって手に入る。サタンを常に「と書いてある」というみ言葉よって打ち負かしなさい。「すべて主をおそれ、主の道に歩む者はさいわいである。あなたは自分の手の勤労の実を食べ、幸福で、かつ安らかであろう」(マタイ 4:4; 詩篇 128:1, 2)。

義の働きを行う用意のできている者は、敵の誘惑によって欺かれることはない。彼の行動は正しいという感覚で導かれ、善悪の区別、真理、高められた真理と誤りの区別をすることができる。天の王国に入る者は、道徳的な義務の最高の基準に到達している者、真理を隠し、欺こうとしていない者、彼らによって神が高められ、そのみ言葉が擁護されている者、彼らのうちにある原則が、サタンのたくらみの正当性を立証するために誤用されていない者である。主の贖われた者のために敷かれた道は、すべての世的な計画や実行のはるか上にある。その中を歩く者は自分たちの原則の清らかさを働きによって示すべきである。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ1909年2月24日)

神が仰せになったことの内に留まる

「女はへびに言った、『わたしたちは園の木の実を食べることは許されていますが、ただ園の中央にある木の実については、これを取って食べるな、これに触れるな、死んではいけないからと、神は言われました』。」(創世記 3:2,3)

エバは神のご命令の言葉に付け加えた。神はアダムとエバに「しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」と仰せになっていた(創世記 2:17)。サタンとのエバの論争の中で、彼女は、「これに触れるな」を付け加えた。ここでサタンの狡猾さがあらわれた。エバのこの言葉は彼を有利にした。彼はその果物をもぎ取ってエバの手に置き、彼女自身の言葉を用いて、次のように言った。もしあなたがそれに触れるなら、あなたは死ぬとこのお方は仰せになった。あなたが見ているように、その実を触っても何の害も受けていないのだから、それを食べても何の害も受けないであろうと。(コンフロンテイション 14)

わたしたちの熱心な兄弟のだれも……主の前に出て、主が彼らになすよう命じておられないテストを作るような危険を冒さないようにしなさい。(伝道374)

わたしたちはパリサイ人の律法のような律法を作らないよう、あるいは人 の戒めを教理として教えないよう注意すべきである。(医療伝道 284)

神は、人への大いなる愛のうちに、彼の行為を指図する律法をお与えになった。それによって、彼がこの地上においてさえ、自分自身の本当の幸福と人類同胞の真の幸福を増し加えるような傾向を持つ事柄をするよう律せられるためであった。日々の生活の中で実行される戒めの原則は、イエス・キリストによる聖天使との交わりのため、道徳的な適格性を与えるために、心と思いを気高くし、聖化させる。全く賢明であられるわたしたちの天父は、人を罪から守り、彼の生涯を整えて、天にふさわしい臣民にする徳を実践するよう導くのにどの規則が要求されるかをご存じであった。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1878 年 7 月 18 日)

主は、その大いなる憐れみのうちに、聖なる生活のご自分の規則、ご自分の戒め、ご自分の律法を聖書でわたしたちに表してこられた。このお方はその中で罪を遠ざけるようにと仰せになる。わたしたちに救いの計画を説明し、天への道をお示しになる。(クリスチャン教育 188)

世界最古のうそ

「へびは女に言った、『あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。それを 食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神 は知っておられるのです』。」(創世記 3:4,5)

〔創世記 3:4,5 参照〕。ここで偽りの父は神の表されたみ言葉への直接の反論を主張した。サタンはエバに、彼女は創造された不死の人であり、死の可能性はないと保証した。もし彼女とその夫が知識の木の実を食べると、彼らの悟りが啓発され、広がり、高尚になり、彼らを神ご自身と同じにすることを、神は知っておられると言った。そしてへびは、エバに答えて、彼らに知識の木の実を食べることを禁じた神の命令は、彼らが知識、すなわち力を得ることがないように、このような従属的な状態にとどめておくために与えられたのだと言った。この木の実は彼らを賢くするには園の他のどの木よりも望ましく、彼らを神と同等へと高めると、彼は彼女に保証した。全ての木の中でおいしい風味と元気にさせる感化力にとって最も望ましいその木の実を神はあなたに与えることを禁じておられると、へびは言った。

へびの言うことは非常に賢く、神の禁止令は不公平であるとエバは考えた。 彼女は非常においしそうに見える果物がたわわになっている木をあこがれに 満ちた願いをもって見上げた。へびは明らかに喜んでそれを食べていた。彼 女は、神が自分に完全に食べる権利を与えておられる他のどの果物にもまし てこの果物を切望した。(対決 13,14)

律法の主張が示されるとき、人は神がご自分の教訓を破ることに対して彼らを罰しないと言いながら、不服従を続けるための言い訳をこらし始める。それについてまじめに考えてみよう。神はわたしの都合に合わせるためにご自分の聖なる律法を変更なさるであろうか。このお方は罪を是認し、不服従を黙認なさるであろうか。もし神がこの類の品性を持っておられるなら、わたしたちはこのお方を敬うことはできない。このお方の権威を尊重することはできない。神の律法へのどの違反も違反者への罰が訪れる。罪の支払う報酬は死である。神はご自分の律法の名誉を注意深く守られる。それは天と地におけるこのお方の統治の基礎である。(いじュー・アンド・ペラルド 1890 年 11 月 18 日)

エデンにおける悲劇

「女がその木を見ると、それは食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ましいと思われたから、その実を取って食べ、また共にいた夫にも与えたので、彼も食べた。」(創世記 3:6)

天使たちは、サタンについて彼らに警告し、この堕落した敵に出会うといけないから、仕事をしているときに、互いに離れてはならないと注意した。天使たちは、また、神が彼らにお与えになった指示に厳密に従うように命じた。というのは、完全に服従するときにのみ、彼らは安全であったからである。……

彼女の第一の誤りは、夫から離れたことであった。次に、禁じられた木のあたりをさまよい、さらに、誘惑者の声に耳を傾けて、「それを取って食べると、きっと死ぬであろう」と神が言われたことをあえて疑った。彼女は、神が、その言葉どおりのことを意味してはおられまいと考えて、思い切って手をのばして、その実を取って食べた。それは、見た目に美しく、食べるのにおいしいものであった。彼女は、神が、実際は彼らのためになるものを禁じられたのだと邪推した。そして、彼女は、その実を彼女の夫に差し出して、彼を誘惑したのである。彼女は、へびが言ったことをみなアダムに告げ、へびが語る力をもっていたことに対する驚きを表した。……

アダムは、これこそ警告されていた敵にちがいない、妻は死ななければならないと感じた。彼らは別れなければならない。エバに対するアダムの愛は強かった。すっかり落胆してしまったアダムは、エバと運命を共にする覚悟をきめた。彼は木の実をつかんですばやく食べた。サタンは狂喜した。彼は天において反逆を起こし、彼を愛し彼の反逆に参加した共鳴者たちを得ていた。彼は、堕落し、他の者をも彼と共に堕落させていた。そして今、彼は、女を誘惑して神に対する不信を抱かせ、神の知恵をさぐって、全知であられる神の計画をきわめさせようとしたのであった。サタンは、女がただひとりで堕落するのではないことを知っていた。エバを愛するあまりに、アダムも神の戒めにそむき、彼女とともに堕落したのであった。

人類が堕落したという知らせは、全天にひろがった。琴は全部鳴りをひそめた。天使たちは悲しみのあまり、頭の冠を脱ぎすてた。(初代文集 257 ~ 259)

エデンからの警告

「よこしまな者の道に、はいってはならない、悪しき者の道を歩んではならない。それを避けよ、通ってはならない、それを離れて進め。」(箴言 4:14, 15)

サタンは、善と悪のまじった知識は祝福となるものだとか、あるいは神がこの木の実をとることを禁じておられるのは、結局、大きな幸福を与えることをひかえておられるのだというようなことを、エバに思わせようと望んだ。サタンは、神がこの果実を食べることを禁じておられるのは、この果実が知恵と能力をあたえる不思議な性質をもっているからであって、神はこのようにして、彼らがいっそう高い進歩をとげ、もっと大きな幸福を見いだすことのないようにしておられるのであると力説した。彼は、自分も禁断の実を食べた結果、話ができるようになったのであるから、もしエバたちもこの果実を食べたら、もっと高い境地に達し、もっと広い知識の分野に入るであろうと言明した。

サタンは、自分が禁断の木の実を食べたために、非常な恩恵をうけたと主張しながら、一方には、神にそむいたために、天より追われた身であることをかくしていた。欺かれ、おだてられ、迷わされたエバが、その欺瞞をみわけることができなかったほど巧妙に、真理の仮面の下に偽りがかくされていた。彼女は、神が禁じているものをほしがり、神の知恵を疑い、知識のかぎである信仰を捨ててしまった。……

「あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となる」(創世記 3:5) とサタンは言った。果たして彼らの目は開いたが、しかしそれは何という悲しい結果をもたらしたことであろう。神の戒めにそむいた彼らが得たものは、悪の知識と罪ののろいだけであった。果実そのものには何の害毒もなかった。また、ただ食欲に負けたことだけが罪というわけではなかった。アダムとエバが神の戒めにそむく者となり、この世に悪の知識をもたらしたのは、彼らが神の恵みを疑い、神のみ言葉を信じないで、神の権威を否定したからであった。それはまた、あらゆる種類の偽りや誤りに対して門を開いた。真理であられるお方ではなく、欺く者に聞き従ったために、アダムはいっさいのものを失ってしまった。(教育 15, 16)

窮屈で不適切な衣服

「すると、〔アダムとエバ〕ふたりの目が開け、自分たちの裸であることがわかったので、いちじくの葉をつづり合わせて、腰に巻いた。」(創世記 3:7)

アダムとエバはどちらもその実を食べ、彼らが神に従っていれば、決して 得ることのなかったはずの知識一神への不服従と不忠実における経験一自分 たちが裸であるという知識を得た。純潔な衣、すなわち彼らを取り巻いてい た神からの覆いが離れ去ったので、彼らはこの天来の衣の代わりにいちじく の葉をつづり合わせて、腰に巻いた。

これは、神の律法の違反者が、アダムとエバの不服従の日以来、用いてきた覆いである。彼らは違反によってもたらされた自分たちの裸を覆うためにいちじくの葉をつづり合わせた。いちじくの葉は不服従を覆うために用いられる議論を表している。主が男女の注意を真理に引きつけると、その魂の裸を隠すためにいちじくの葉をつづり合わせることが始まる。しかし罪人の裸は覆われない。このみえすいた働きに関心のあるすべての者によってつなぎ合わされた議論はすべて失敗に終わる。

主イエス・キリストは覆い、ご自身の義の衣を備えておられるが、それは悔い改め信仰によってそれを受け入れるどの魂にも着せてくださるためである。……罪は律法の違反である。しかしキリストは、一人びとりが自分の罪を取り除いていただくことができるために死なれた。いちじくの葉の覆いはわたしたちの裸を覆うことは決してない。罪は取り除かなければならず、キリストの義の衣が神の律法の違反者を覆わなければならない。主が信じる罪人をご覧になるとき、このお方は彼を覆っているいちじくの葉ではなく、エホバの律法への完全な従順であるご自身の義の衣をご覧になる。(レピュー・アント゚・ヘラルド1898 年 11 月 15 日)

警告を受けなさい。あなたの尊い猶予の期間を、罪の結果である裸を覆うためにいちじくの葉をつづり合わせるために充ててはならない。(原稿リリース 21 巻 194)

隠しても無駄である

「人とその妻とは主なる神の顔を避けて、園の木の間に身を隠した。」(創世記 3:8)

主はアダムとエバが禁じられた木の実を食べたのをご覧になった。彼らは 罪悪感でこのお方のみ前から逃げ、身を隠したが、神は彼らをご覧になり、彼らは自分たちの恥をこのお方の目から覆いかくすことはできなかった。(レピュ -・アンド・ヘラルド 1888 年 3 月 27 日)

アダムとエバは禁じられた実を食べることは非常にささいなことであり、神が宣言なさったほど恐ろしい結果をもたらすはずはないと自ら言い聞かせた。しかしこの小さなことは罪であり、神の不変の聖なる律法の違反であった。そしてそれはわたしたちの世に死と数え切れないほどの苦悩の水門を開いた。各時代にわたり地から嘆きの叫びが絶え間なく上っており、人の不服従の結果として万物が共に痛みでうめき、苦労している。天そのものが神に対する人間の反逆の影響を感じている。カルバリーは、神の律法の違反に対するあがないの供え物として要求された驚くべき犠牲の記念碑として立っている。罪をささいなこととして考えないようにしよう。無限の神の御子の手と足とわき腹は、言い表せない深い恨みとのろいの証を宇宙の前に担うべきではないであろうか。

ああ、老若の思いに罪の非常な罪深さに関する正しい印象が与えられるように!ああ、すべての者が神に対する罪の攻撃と人類に対するその危害を正しく認識することができると良いのに!真理のみ言葉は「その罪は必ず身に及ぶ」と宣言する(民数記 32:23)。あなたの生涯の一つ一つの行為の真の性質が知られるようになる。この世においてすら神のみ摂理によって、なにか予期しない状況があなたの悪い秘密の行為を暴露するかもしれない。しかしたとえあなたが自分の真の品性を人々の目から隠すことに成功したとしても、自分の罪を悔い改めず、キリストの力を通して悪を捨て去らないすべての魂には、発覚という避けられない日が待っている。キリストはわたしたちが生きられるようにと、死なれたのである。……「神はすべてのわざ、……を……さばかれるからである」(伝道の書 12:14)。(同上 1888 年 3 月 27 日)

恥じ、わなにかかる

「主なる神は人に呼びかけて言われた、『あなたはどこにいるのか』。彼は答えた、『園の中であなたの歩まれる音を聞き、わたしは裸だったので、恐れて身を隠したのです』。」(創世記 3:9, 10)

アダムとエバが禁じられた実を食べた後、彼らは恥と恐怖の意識に満たされた。初め彼らの唯一の考えは、神の御前に自分たちの罪をどのように言い訳し、恐るべき死の判決をどのように逃れるかであった。(教会への証5巻637)

彼らが罪なく清いときであれば、喜んで創造主の近づいて来られるのを 歓迎するのであったが、いまは、恐れて逃げ、園の奥深いところに隠れよう とした。(人類のあけぼの上巻 46)

サタンは、わたしたちの最初の両親の堕落を果たした。そしてこの時から 現在に至るまで、人間の野望を満足させること、また利己的な希望や願望 にふけることは、人類の滅びであることが立証された。アダムは神のもとで、 天の家族の原則を維持するために地上の家族のかしらとして立つべきであり、 これは平安と幸福をもたらすはずであった。しかしだれも「自分のために生き」 ないという律法に(ローマ 14:7)、サタンは反対すると決心していた。彼は自 己のために生きようと願い、自分を感化力の中心にしようとした。天で反逆 を起こさせたのがこれであり、地上に罪をもたらしたのは、この原則を人が 受け入れることによってであった。アダムが罪を犯したとき、人は天が任命さ れた中心と関係を絶って、悪魔が世界の中心をなす力となった。神の御座が あるはずのところにサタンは自分の王座を据えた。世はその敬意を心からの 捧げものとして敵の足元に置いた。

神の律法への違反はその結果として悲哀と死をもたらした。人の力は不服 従によってゆがめられ、利己心が愛に取って代わった。彼の性質は非常に弱 まり、悪の力に抵抗することは不可能になった。そして誘惑者は人を創造す る神の計画を妨げる目的が果たされつつあるのを見た。……人々は自分たち を彼の車に捕虜としてつなぐ支配者を選んだ。(レビュー・アンド・ヘラルド 1913 年 1月16日)

自分以外のだれかを非難する

「神は〔アダムに〕言われた、『あなたが裸であるのを、だれが知らせたのか。 食べるなと、命じておいた木から、あなたは取って食べたのか。』人は答えた、『わ たしと一緒にしてくださったあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べ たのです』。」(創世記 3:11,12)

アダムは、自分の罪を否定することも、言いわけをすることもできなかった。 彼は、悔い改めの精神をあらわす代わりに、彼の妻を非難し、ひいては、神 ご自身の責任にした。「創世記 3:12 引用」。エバを愛するがために、神に喜 ばれることも、楽園の彼の家も歓喜に満ちた永遠の命をも捨てた彼が、罪を 犯した今は、罪の責任を妻ばかりでなく、創造主ご自身にまで負わせようと した。罪の力は、これほどに恐ろしいのである。女が「あなたは、なんとい うことをしたのです」と問われたとき、彼女は、「へびがわたしをだましたのです。 それでわたしは食べました」と答えた (創世記 3:13)。 「どうしてあなたは、へ びをお造りになったのですか。へびがエデンにはいるのをどうしてお許しにな ったのですか」という質問が自分の罪に対する彼女の言いわけの真意であっ た。このようにして、彼女もアダムと同じく、彼らの堕落の責任を神のせいにし た。自己を義とする精神は、偽りの父から始まった。この精神は、われわれ の祖先がサタンの力に屈服すると直ちにあらわれた。そして、それ以来、アダ ムのすべてのむすこ、娘はこの精神をあらわしてきた。けんそんに自分の罪を 告白するかわりに、彼らは他の人……を非難して、自分を弁護しようとする。(人 類のあけぼの上巻 46,47)

罪のために道徳的知覚が鈍くなってしまうと、悪を行う者は自分の品性の欠陥を認めもしなければ、自分が犯した罪の恐ろしさを悟ることもない。罪を示す聖霊の力に従わなければ、人は自分の罪に対して部分的に盲目のままである。であるから、その人の告白はまじめでもなければ熱心でもない。自分の罪を認めて悪かったとは言うものの、そのたびに自分の行為に弁解をつけ加え、ああいう事情さえ起らなかったら、自分はああもしなかったしこうもしなかったし、なにもしかられることはなかったのだと言う。……〔しかし〕真の悔い改めは、自分の罪を自分で負い、なんの虚飾も偽善もなく、罪を認めるのである。(キリストへの道 49~51)

必要とされた贖い代―そして見出された!

「もしそこに彼のためにひとりの天使があり、千のうちのひとりであって、仲保となり、人にその正しい道を示すならば、神は彼をあわれんで言われる、『彼を救って、墓に下ることを免れさせよ、わたしはすでにあがないしろを得た。』」(ヨブ 33:23,24)

人類が失われ、神の創造なさった世界が不幸と病気と死の運命を背負っ た人間によって満たされ、罪びとにとってのがれる道のないことがわかった とき、天は悲しみに満たされた。アダムの全家族は死なねばならない。わた しは美しいイエスのお姿を見、その顔つきに同情と悲しみの表情をみとめた。 まもなくわたしは、イエスが、天父をつつんでいる非常に輝かしい光に近づ かれるのをみた。わたしにつきそっていた天使は、イエスが天父と親しく語 っておいでになると言った。イエスが天父とお話しになっている間、天使たち は心配で緊張しているようにみえた。イエスのお姿は、天父のまわりの輝く 光の中に、三度見えなくなった。三度目に、天父のところから出てこられる イエスのお姿がみられた。イエスの顔つきは落ちついて、困惑や疑いの影は 少しもみられず、言いあらわしようのない慈愛に満ちていた。その時イエスは、 失われた人類のためにのがれの道が備えられたことを天使の万軍にお知らせ になった。イエスは、ご自分の生命を身代金として提供し、死の宣告をご自 身に引きうけたいと天父に嘆願なさったことを語られた。 それは、イエスを通 して人類が罪のゆるしを得、イエスの血の功績を通し、また神の律法に従う ことによって神の恩恵をあたえられ、美しい園へつれて行かれて生命の木の 実を食べることができるようになるためだった。

最初天使たちはよろこぶことができなかった。というのは、イエスが彼らに何一つかくさないで、救いの計画をうち明けられたからである。イエスは、ご自分が天父の怒りと罪を犯した人類との間に立たれることや、ご自分が不義とあざけりを一身に負われても、彼を神のみ子として受け入れる者は少ないことなどを、天使たちにお語りになった。(初代文集 260, 261)

〔天使は言った〕「罪の人類を滅ぼすか、それとも人類のために愛し子を死なせるかということは、天の神にとっても戦いでした」と。(初代文集 264)

なんという大きな代価!

「あなたがたのよく知っているとおり、あなたがたが先祖伝来の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく、きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである。キリストは、天地が造られる前から、あらかじめ知られていたのである」(ペテロ第一1:18~20)

〔イエスはあらかじめ、御使たちに次のことを語られた。〕イエスは、天の一切の栄光を捨てて、この地上に人としてあらわれ、人として身をいやしくし、人の受けるすべての誘惑を自らの経験を通して知り、どうしたら試みられる人々を救助することができるかを知られるのである。そして最後に、教師としてのイエスの使命が達成されてからは、人の手に渡され、サタンと悪天使たちが悪人たちをそそのかして、苦しめることのできるかぎりのあらゆる残虐と苦難を加えるのを忍び、最も残酷な死に方によって、不義な罪びととして天と地との間にかけられ、天使たちすら目をそむけ、顔をおおうような恐るべき苦悶にあわれるのである。イエスは肉体的な苦痛を経験されるばかりでなく、それとは比べものにならないほどの精神的な苦痛を味わわれる。全世界の罪の重荷が彼の上にのしかかるのである。イエスは、ご自分が死んで三日目にふたたび甦えり、わがままで不義な人類の執り成しをするために、天父のもとに昇天されるということをお語りになった。

天使たちはキリストの前にひれ伏した。彼らは自分たちの生命を捧げたいと申し出た。イエスは、天使の生命では負債を払うことができないから、自分が死んで多くの人を救うのだと仰せになった。キリストの生命だけが、人類の身代金として天父に認められるのである。(初代文集 261,262)

これほどの愛と謙遜の対象として、わたしたちはどれほど贖いの神秘を感謝すべきであろうか。最も魅力的なかたちで示された世の壮麗さは、この偉大なへりくだりの前に無意味なものとして沈むべきである。キリストに真に従う者はこのお方のために喜んで苦しむべきである。彼らがこの神秘を熟考するとき、心は優しい愛、生き生きとした献身で満たされる。彼らは、よい働きをしながら巡回されたお方、また罪の退廃からわたしたちを贖うためにご自分の命を進んで与えてくださったお方の模範に従わなければならないと感じる。(レピュー・アンド・ヘラルド1909 年7月15日)

救うために苦しむ

「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日目によみがえる。」(ルカ 9:22)

イエスは、天使たちにも果たさねばならない役割があることをお語りになった。すなわち、彼らはイエスと一緒にいて、幾度かイエスを力づけるのである。イエスは人間の堕落した性情をとられるので、その力は天使たちに匹敵することさえできない。天使たちが、イエスの屈辱や大きな苦難の目撃者となり、イエスの苦難や彼に対する人々の憎悪を目に見るときに、彼らは、魂の奥底までゆり動かされ、イエスを愛するあまり、彼を殺害者の手から救い出そうと思うのだが、手出しをして目の前に起こるどんな事柄も妨げてはならないのである。天使たちはまた、キリストの甦えりにあたって、一つの役割を演じなければならない。……

イエスは、聖なる悲しみの中にも、天使たちを慰めはげまし、今後は彼のあがないたもう人々が彼とともにいることや、彼はご自分の死によって多くの者をあがない、死の権力をもっている者を滅ぼしたもうことなどをお知らせになった。そのとき天父は、王国と、全天における王国の尊厳をキリストにあたえ、彼はそれを永遠に保ちたもうのである。サタンと罪びとは滅ぼされ、天やきよめられた新しい地を、もう決して妨害するようなことはなくなる。イエスは、天父の承知したもうたこの計画に天使たちが同意し、堕落した人類が、彼の死により、ふたたび高められて、神の恩恵にあずかり、天にうけ入れられることをよろこぶようにとお命じになった。

そのとき、言いあらわしようのないよろこびが天を満たした。天使たちは、 賛美と崇敬の歌をうたった。彼らは、神が、反逆した人類のために愛し子を 死なせたもう、その大きないつくしみとへりくだりのゆえに、立琴をかきなら して、これまでよりも一段と高い調べをかなでた。イエスが、天父のひざも とを離れることを承知し、苦難と苦悶の一生をえらび、屈辱的な死を通して、 人に生命をあたえたもうその克己と犠牲に対して、賛美と崇拝がわき起こった。 (初代文集 262, 263)

象徴における約束

「主なる神はへびに言われた、『おまえは、この事を、したので、すべての家畜、野のすべての獣のうち、最ものろわれる。おまえは腹で、這いあるき、一生、ちりを食べるであろう。わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう』。」(創世記 3:14, 15)

〔創世記 3:15 引用〕とサタンに言われた宣告は、われわれの最初の両親にとって、キリストを通してなされるあがないの、約束であった。(患難から栄光へ上巻 238)

だれが、神の支配と統治の中でこのお方に任命された原則を、サタンの 計画をくじくためにもたらし、世界をその忠誠に連れ戻すことができるであろ うか。神は仰せになった、わたしは御子をつかわす。〔ヨハネ 3:16 引用〕。 これは罪のための救済策である。 キリストは仰せになる。 「サタンが彼の王座 を置いたところに、わたしの十字架は立つ。サタンは追い払われ、わたしは 全ての人をわたしに引き寄せるために上げられる。わたしは贖われた世界の 中心となる。主なる神が高められる。今人間の野望、人間の情欲に支配され ている者がわたしのための働き人になる。悪い感化力は全ての善に対抗する ために陰謀をたくらんできた。彼らはエホバの律法に反対するために、人々 にそれを正しいと考えさせようと共謀してきた。しかし、わたしの軍勢は闘争 においてサタンの勢力に対抗する。わたしの霊が彼らに対抗するために天の すべての代理者と団結する。わたしはすべての聖化された人間の代理者を宇 宙に配置する。わたしの代理者は一人として欠けるべきではない。わたしは、 わたしを愛するすべての者のための働きを持っており、わたしの指示の下で働 くどの魂のためにも仕事を持っている。サタンの軍勢の活動、人の魂を取り 巻く危険はどの働き人のエネルギーをも必要とする。しかし強制はされない。 人の悪行は、神の愛、辛抱強さ、長い忍耐によって対応すべきである。わた しの働きはサタンの支配の下にいる者を助けるものとなる」。

神は、キリストを通して、人を創造主との初めの関係に連れ戻し、サタンによってもたらされた混乱させる感化力を正すために働かれる。(教会への証6巻236)

欺いてくびきにつなぐ

「ただ恐れるのは、エバがへびの悪巧みで誘惑されたように、あなたがたの 思いが汚されて、キリストに対する純情と貞操とを失いはしないかということで ある。」(コリント第二 11:3)

エバはへびにだまされ、神はご自分が仰せになったようにはなさらないと信じ込まされた。……へびは彼女が死ぬことはないと言った。そして彼女は実を食べて、死を意味するように判断できる悪い結果を何も感じなかった。しかし、その代わりに、楽しい感覚があり、彼女はそれをきっと天使が感じているものだろうと想像した。彼女の経験はエホバの明確な命令に真っ向から逆らうものであったが、アダムはそれによって誘惑されるままに屈した。

わたしたちはしばしばこのようなことを、宗教界においてすら見出す。神のはっきりとした命令が破られる。そして「悪しきわざに対する判決がすみやかに行われないために、人の子らの心はもっぱら悪を行うことに傾いている」(伝道の書 8:11)。神の最も明確な命令を目の前にしながら、男女は自分自身の傾向に従い、その後であつかましくもこのことに関して、神のはっきりとしたみ旨に逆らって行くことを許してくださるよう神を説得するために祈るのである。サタンはそのような者のそばに来て、エデンでエバにしたように、彼らに印象を与える。彼らの思いが働き、彼らはこれを主が彼らに与えて下さった最も素晴らしい経験として理解する。しかし真の経験は、自然の法則、神の法則と調和している。偽りの経験は、命の法則とエホバの教訓にこぞって反対する。(健康への勧告 108, 109)

〔サタンは〕、彼らが人間の領域を超えて高められるべきであると、エバをおだてて信じるようにさせた。しかしキリストは、ご自分がわたしたちの前に置かれた模範によって、人類家族が自分たちの人間の領域で神の御言に従いつつ、人となることができるように励まされる。このお方ご自身がサタンの属性を取るためではなく、神のご品性の写しであるその律法への従順と道徳力のうちに人となられた。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ1897年10月14日)

キリストだけが利己心の世で汚れのないままお立ちになった。そこでは人々はサタンによって自分たちの手に置かれた計画を成し遂げるために、友あるいは兄弟を破滅させるのである。……利己心という騒音のただなかで、このお方は人々に仰せになることができる。あなたの中心一神に帰りなさい。(教会への証6巻237)

野望によって落とされる

「〔神は〕女に言われた、『わたしはあなたの産みの苦しみを大いに増す。あなたは苦しんで子を産む。それでもなお、あなたは夫を慕い、彼はあなたを治めるであろう』。」(創世記 3:16)

神は創造のときに、〔エバ〕をアダムと等しいものに造られた。もし彼らが神に従って、その偉大な戒めに調和していたならば、彼らは、互いに調和しあってきたはずであった。しかし、罪が調和を破った。だから、一方が他方に従属することによって彼らの一致と調和が保たれるようになった。エバは最初に罪を犯した。彼女は、神の命令に反して、夫のそばを離れたために、誘惑に陥った。また、アダムは、彼女のすすめによって罪を犯した。そこで、彼女は、夫に従う立場におかれた。神の律法が命じているこの原則を、堕落した人類が守っていたならば、この宣告は、罪の結果によるものであったとは言え、彼らにとって、祝福となったことであろう。ところが、こうして与えられた優位を男が乱用したために、女の運命は非常に苦しく、彼女の人生は重荷となった。

エバは、エデンの家庭で、夫のそばにいて、完全な幸福を味わっていた。 しかし、落ちつきを失った現代のエバたちと同様に、彼女は、神がお定め になったところより、もっと高い身分になりたいと望むようにそそのかされた。 彼女は、初めに置かれた地位より高く昇ろうとして、それよりはるか下に落ち た。神のご計画に従って、実生活の義務を快く果たそうとしない者は、みな 同様になる。神がお与えにならなかった地位を得ようと努めて彼らが祝福と なることのできる場所をあけるものが多い。高い身分を望んで、女性の尊厳 と品性の気高さを犠牲にし、天が特に彼らに与えた働きを怠る者が多いので ある。(人類のあけぼの上巻 47, 48)

天の王の娘たち、王家の家族は、より気高い生き方に到達する責任の重荷を感じるが、それは彼らが天との密接な交わりに入れていただくことができるためである。……〔彼らは〕この終わりの時代に女性の思いと愛着を吸い込む流行と愚行に満足しない。(教会への証3巻484)

呪われた地にもかかわらず希望がある

「〔神は〕人に言われた、『あなたが妻の言葉を聞いて、食べるなと、わたしが命じた木から取って食べたので、地はあなたのためにのろわれ、あなたは一生、苦しんで地から食物を取る』。」(創世記 3:17)

かつては神のご品性、すなわち善の知識だけが書かれていたところに、 今はそれと共にサタンの品性である悪の知識が書きしるされている。いまや 善と悪の知識を表わしている自然から、人は、罪の結果に対する警告を絶え ず受けなければならなかった。

しぼむ花に、散る木の葉に、アダムと妻は、衰えというもののきざしを初めてまのあたりに見た。すべての生物はやがて死ななければならないというきびしい事実が、彼らの心にはっきり迫ってきた。彼らの生命をささえている空気にさえ、死の種がひそんでいた。

彼らはまた自分たちの失った支配権をたえず心に思い出した。人間よりも 下級な被造物の中にあって、アダムは王としての立場にあった。彼が神に忠 誠心を保っていた間は、自然界の万物は、彼の統治に従っていた。しかし 彼が神の戒めにそむいたときに、この統治権は失われた。アダム自身によっ てこの世界にもたらされた反抗心は、動物界にまでひろがった。……

〔しかし〕彼らは、自分たちが経験しなければならないいばらやあざみのことや、労苦や悲哀のことや、土に帰らなければならないことなどを聞く前に、希望を与えずにはおかない約束の言葉をきかされた。サタンに屈服したために失われたすべてのものは、キリストによって再びとりもどされることができるようになった。

自然界もまたこの救済の暗示をわれわれにくりかえしている。自然界は、罪のために傷つけられてはいるものの、いぜんとしてそれは神の創造について語り、また救済について語っているのである。地は衰滅という明らかなしるしを通して、罪ののろいをあかししているが、しかもなお生命を与える能力を、豊かに美しく表象している。木々はその葉をふるいおとしても、それはもっと新しい緑したたる衣をまとい、花はしぼむが、やがてまた新しい美しさに姿を装ってあらわれる。神の創造力の一つ一つの現われには、われわれ人間が、「真の義と聖」の中に、再び新しく創造され得るとの確証が示されている(エペソ4:24)。(教育17~19)

エデンからの立ち退き

「そこで主なる神は彼〔アダム〕をエデンの園から追い出して、人が造られたその土を耕させられた。神は人を追い出し、エデンの園の東に、ケルビムと、回る炎のつるぎとを置いて、命の木の道を守らせられた。」(創世記 3:23, 24)

アダムとエバは神の創造されたみ業から得られ、聖天使の教えによって受けるこのお方の知識に完全に満足しているべきであった。しかし彼らが知識を持つべきではないと神が計画されたことを知りたいとの好奇心が彼らに起こった。罪に無知であることは彼らの幸福のためであった。彼らが禁じられた実を食べることによって到達すると考えた知識の高い状態は、彼らを罪と罪悪感の堕落へと投げ落した。(対決 15)

人類が堕落したという知らせは、全天にひろがった。琴は全部鳴りをひそめた。天使たちは悲しみのあまり、頭の冠を脱ぎすてた。全天は動揺した。罪を犯したふたりをどう処置したらよいかを決定するために、会議が開かれた。天使たちは、アダムとエバが命の木に手をのばしてその実を食べ、永遠の罪人になりはしないかと恐れた。しかし、神は、罪人たちを園から追放すると言われた。天使たちは、ただちに命の木にいたる道を守るように、命令を受けた。アダムとエバが、神に従わないで、神の不興をこうむったのちも、命の木の実を食べて、罪と不服従をいつまでも続け、罪を永遠に伝えようというのが、サタンのたくらんだ計画だった。しかし、聖天使たちが、命の木にいたる道をさえぎるためにつかわされた。これらの力強い天使たちは、おのおのその右手に輝く剣のようなものを持っていた。

こうしてサタンは勝利を収めた。彼は、自分の堕落によって、他の者たちを苦しみに陥れた。彼は天から閉め出され、彼らは楽園から閉め出されたのであった。(初代文集 259)

アダムとエバは、悪の知識を選んだ。もし彼らが、その失った地位を回復しようとすれば、それは、彼らが自ら招いた不利な事情の下に回復されなければならなかった。(教育 17)

神の大いなる憐れみのしるし

「主なる神は人とその妻とのために皮の着物を造って、彼らに着せられた。」 (創世記 3:21)

へりくだりと言い表せない悲しみのうちに、アダムとエバは神の戒めに不 従順になるまでは非常に幸福であった麗しい園を離れた。環境が変わり、罪 を犯す前と同じではなくなった。神は彼らがさらされた肌寒さの感覚、その 後暑さの感覚から守るために、皮の着物を彼らに着せられた。

神の御使たちはこの堕落した夫婦を訪問し、彼らに、神の律法への違反のゆえに、これ以上彼らの聖なる地所、エデンの家庭を所有し続けることはできないが、彼らの場合は全く希望がないわけではないことを告げるのを委ねられた。神の御子は彼らの希望のない状態をご覧になって、あわれみに動かされ、彼らに当然与えられるべき罰をご自身に引き受け、キリストが提案なさる贖罪のうちに信仰によって彼らが生きることができるために、彼らのために自発的に死んでくださるのであった。希望の戸が開かれ、人はその大きな罪にもかかわらず、サタンの完全な支配下にいなくてもよいのである。彼に恩恵期間が与えられた。それは、その期間の間に、悔い改めと神の御子の贖罪を信じる信仰の生活によって、彼が御父の律法の違反から贖われることができ、このようにして、その律法を守るための御子の努力が受け入れられる立場にまで高められるためであった。

天使たちは、彼らが神の律法に違反したことを知らされたとき、天で感じられた悲しみを語った。そのことにより、キリストはご自身の尊い命を大いなる犠牲にする手段を取られたのであった。

アダムとエバが、神の律法がどれほど高められた聖なるものであるか、その違反が彼らを完全な滅びから救うためにそれほどまでに高価な犠牲を必要とするものであるかを悟ったとき、彼らは、愛する神の御子がこの大きな犠牲を払うよりは、自分たちと後世の者が自分たちの違反の罰を耐えることができるようにしてほしいと嘆願した。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ1879年1月30日)

なんと驚くべきへりくだり

「そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまこととに満ちていた。」(ヨハネ 1:14)

人のためのキリストのへりくだりは天使たちにとって驚くべきことであった。 キリストを通じてのあがないは彼らにとって愛と知恵の神秘であり、創造のみ業よりも彼らの関心を奪った。それほどの愛は彼らを驚嘆させ、彼らの心を奪った。それが非常に熱烈で無類の利己心の全くないものであったので、彼らはそれを理解することができなかった。初めに人の創造、天と地の構成、創造主が自然界すべてを装われた美と栄光は、全天の驚きと感嘆、彼らの崇敬と愛を呼び起こした。しかし御座をベツレヘムの馬ぶねと取り替え、ご自身をあざけりと侮辱、貧困と残酷な死にさらす彼らの司令官のこのへりくだりは、輝く天の万軍から最高の熱愛と最も深い喜びを奮い起こした。彼らの喜びと賛美は、ベツレヘムの丘で羊飼いへの知らせでほとばしり出た。……

この大いなる犠牲を払っていただいた者、すなわち人間だけが無関心を表した。ほかのすべての者にまさって関心示し、魅了され、心を奪われ、最も深い喜びに満たされるべき者が心を動かされず、感動しなかった。この無関心は今日神に公に反抗する者だけでなく、キリストに従っていると公言するものの中にはっきりみえる。これらの人々はもっと大きい有罪判決を受ける。なぜならキリストは、このお方のみ旨に公然と反抗して立つ者によってよりも、み名を公言しながら、働きにおいてこのお方を否定する者によってはるかにもっと辱められるからである。キリストは、罪人の罪深い生活によって辱められる以上に、生活に慎重さがなく自分たちの公言する真理によって聖化されていない自称クリスチャンによって辱められるのである。(ルビュー・アンド・ペラルド1909年7月15日)

わたしたちに示されてきた偉大で広大な真理がもっと成し遂げない理由は、わたしたちがこれらの真理に生きないからである。それゆえそれらはわたしたちを感化する力がない。わたしたちは真理をもっと深く感謝する必要がある。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ1900年5月2日)

暗闇に輝く光線

「〔イエスは〕おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである」。 (マタイ 1:21)

エデンにおけるアダムの違反の後、神がわたしたちにお与えになったキリストは、わたしたちが自分の罪のうちに救われるのではなく、わたしたちの罪から救われるためであり、またわたしたちが神への忠誠に立ち返り、従順な子となるためであった。わたしたちが神の支配する御霊に自分の思い、魂、体、自分のすべてを委ねるとき、そのとき真理の御霊はわたしたちと共におられる。……

〔破られた〕神の律法の罰に苦しむため、神がわたしたちのために死ぬようにと、ご自分のひとり子を与えてくださったのは本当である。わたしたちはこのことをよく考え、熟考すべきである。そして堕落した人類への神の計り知れない愛を絶えず熟考するとき、わたしたちは神を知り始め、このお方を良く知るようになり、このお方の知識を持ち、イエス・キリストがわたしたちの世界に来られたとき、このお方がどのようにご自分の王衣と王冠を脇へ置き、その神性に人性をまとわれたかを知る知識を持つ。なぜならこのお方は、ご自分の貧しさによってわたしたちが富むものとなることができるために貧しくなられたからである。御父が御子をここにつかわされた。そしてまさに宇宙の小さな原子にすぎないこの世界で、人類がかつて知った中で最も壮大な光景が繰り広げられた。……

神は世に対してどのように正しくあらわされるべきであったか。このお方が 愛の神、憐れみ、親切、哀れみに満ちたお方であることがどのように知られ るべきであったか。世はこのことをどのように知るべきであったか。神が御子 をお送りになった。そしてこのお方は神のご品性を世にあらわすのであった。

サタンは神と人との間に入り込み、自らの身を置いた。人間の思いを脇へそらすのが彼の働きであり、神と、わたしたちの世界にある道徳的暗闇、堕落、不法全体との間をわたしたちが識別できないように、自分の暗い影をわたしたちの道に投げかける。これに対してわたしたちはどのようにすべきであろうか。わたしたちは暗闇の中にとどまるのであろうか。否、ここにわたしたちの暗い世界を天の光の中に連れてくる力がわたしたちのためにある。キリストは天におられ、天の光をもたらし、暗闇を追い返し、ご自身の栄光の日光を入れてくださる。そのときわたしたちは堕落と汚染と汚れのただなかに天の光を見る。(エレン・G. ホワイト 1888 年原稿 74,75)

「答えられた疑問」(VII)

A・C・サス執筆

疑問 No.16

144,000人の印する働きは、教会の最後の働きです。セブンスデー・アドベンチスト運動の開始である1844年から始まることはあり得ません。

答え

この議論は、証の書の次の言葉に基づいています。

「特に教会のための最後の働き、すなわち神のみ座の前で傷のない者として立つ 144,000 人の印する時に、彼らは公言する神の民の悪を最も深く感じるのである。」(教会への証3巻266)

この証の書は、他の証の書となんら矛盾してはいません。女預言者はAD 27年に設立され、その終わりの期間が 1844年に始まったキリスト教会の最後の働きについて述べています一ですから、その時から印する働きが始まり、彼女は印する働きの終わりと言及しているのです。神の教会は、後の雨が注がれる時に特別な働きがあります。まだバビロンの中にいるまじめな魂は召しに注意を払い、そこから出て、残りの民に加わり、生ける神の印を受けます。

再臨運動の初期の時代に、多くの信徒たちは印する働きが何世紀もの間、 進められてきたと信じていました。

「ある兄弟は、黙示録 20 章にある千年期は過去のもので、黙示録 7 章と 14 章に述べられている 144,000 人はキリストの復活の時によみがえらされた人々だと考えていた。」(ライアスケッチ 110, 111)

ある人々が 144,000 人の印する働きはクリスチャン時代の初めに始まったと信じていたために預言の霊はそれがキリスト教会の始めの働きではなく、終わりであることをはっきりとさせたのです。

ユライヤ・スミスもまた黙示録 7:1~8の働きは、クリスチャン時代の最後の場面で成し遂げられること述べた説明をしています。

「この場面は確かに将来のものである。なぜなら、エレミヤの預言が記されて以来、このようなことは一つも起こったことがないからである。そしてこのような場面は、地上の最後の悩みの時が訪れるまで、目撃されることはないからである。ダニエル 12:1。では、もし黙示録 7:1 の四方の風の吹くのが、同じ場面のことだとすれば(そして、『地の四すみ』から吹く四方の風のもたらすのが『大嵐』だとすれば、どうであろう?)、黙示録 7:1~8 の場面は終わりの時代にあてはまり、すべての地上の光景を閉じる準備の働きなのである。であるから、144,000 人は地上の『神の僕ら』の最後の世代のうちに見出されなければならない。そして彼らの印する働きは、人の間における最後の特別な宗教的運動でなければならないのである。それはクリスチャン時代のクリスチャン運動の締めくくりである。」(レビュー・アンド・ヘラルド 1897 年8月10日)

疑問 No.17

144,000人は文字通りの数字ではありえません。なぜなら、預言の霊は彼らがガラスの海の上に真四角に並んでいたと述べていますが、数学的に言って、144,000 は決して真四角にはならないからです。

答え

144,000人が真四角に並ぶと述べている記述は、初代文集の66ページの中にあります。

「われわれは、一緒に雲の中に入り、七日間のぼっていって、ガラスの海に着いた。そのとき、イエスは、冠を持って来られて、ご自分の右の手で、それをわれわれの頭にのせてくださった。彼は、われわれに黄金の立琴と勝利のしゅろの枝をお与えになった。十四万四千の人々は、このガラスの海の上に、真四角に並んだ。」(初代文集 66)

わたしたちはもし間隔のつまった四角を思い描くなら、たしかに 144,000 では真四角は作れないことに同意します。しかし、144,000 人は間隔のつまった真四角ではなく、真ん中のあいた四角に並ぶことを念頭に置くべきです。わたしたちは次の引用を読むことによってそれを理解します。

「生ける聖徒たちは、またたく間に変えられ、よみがえった聖徒たちと一

緒に、空中において主に会った。……車は聖都をめざして上へ上へとのぼって行った。都に入る前に、聖徒たちは、イエスをまん中にして、真四角な隊形をつくった。」(初代文集 463, 464)

ここに、「真四角」は真ん中のあいた四角だという説明があります。なぜなら、イエスは144,000人の真ん中に立たれるからです。

聖徒たちが真四角を形成する並び方としていろいろな可能性がありますが、わたしたちはそれがどのようであるかは正確にはわかりません。なぜなら、それは聖書にも預言の霊にも記されていないからです。しかし、記録は、144,000人が真四角を形成すると教えています。そして次のような可能性を考えることができます。

一つの可能性は 9000 人の聖徒たちの列を四つ片側並べると 36,000 人になり、これを 4 倍にすれば 144,000 人になります。

他の可能性として、4,000人の聖徒たちを9列片側に並べ、36,000人とし、 それを4倍にすれば144,000人になります。

第三の可能性として一列に 13,500 人を並べ、内側に第二の列は 10,500 人、さらに内側に第三の列は 7,500 人、そして第四の列を 4,500 人とします。数字を合計しますとそれぞれが 36,000 人になります。他の 3 面も同様に並びます。

真四角に並ぶ第四の可能性は、380 に380 をかけると144,400人になります。余分な400人分の占める場所は20人が20倍占める場所であり、400平方です。この場所がイエスの立たれる真ん中の場所になります。

他の可能性としては、それぞれ 36,000 人の長い列を各側に置けば真四 角となり、中にイエスがおられて、回りながら、一人ひとりの頭に冠を置いて 下されば初代文集 66 ページと調和します。

提示された五つの可能性は、144,000人がガラスの海の上にこのように並ぶという意味ではありません。しかし、わたしたちは預言の霊の記述を疑うことも疑問視することもなく、また144,000人が文字通りの数であることを疑うこともなく、真ん中のあいた真四角を形成する様々な可能性があるということを知ることができます。

疑問 No.18

子供が小さいときにどのように印されることができますか。彼らにはメッセ

答え

たしかに小さい子供たちはメッセージをはっきりとは理解しません。そのため、両親には彼らの若い年齢において彼らに対する責任があります。親は子供たちを神の畏れのうちに訓練すべきです。次の証の書によれば、もし親が忠実であれば、主は彼らの子供たちが印されていなかったとしても、主は悩みの時に彼らを保護して下さいます。

「子供たちにあなたがたに従うことを学ばせなさい。そうすれば、彼らはもっと容易に神の戒めに従い、このお方のご要求に服することができる。自分の子供たちと共に、子供たちのために祈ることをなおざりにしないようにしよう。『幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない』と仰せになったお方は、彼らのためのわたしたちの祈りを聞いて下さる。そして、もし子供たちが主の薫陶と訓戒とによって、育てられていれば、信じる両親の印もしくはしるしが、彼らの子供たちを覆うのである。」(レピュー・アンド・ヘラルド1854年9月19日)

しかしながら、もし両親が自分の義務に忠実でなく、自分の子供たちを育てるのに不忠実であれば、そしてもし彼らが不従順であれば、神は彼らの小さい子らの命を守られることはないことが次の言葉に明らかにされています。

「腰に墨つぼをもった御使は、不敬で不従順な親を敬わない子供には一人として神の印を押すことはない。滅びの天使は、老若ことごとく、男女子供とも殺すように任命されている。もし子供たちが従順でなく、自分の両親に服従しないのであれば、神に対しても同じなのである。」(安息日学校働き人1885年10月1日)

印を受けることは、子供の年齢と彼の持つ理解力に大いに依存します。 もし子供たちが責任を持つ年齢に達していれば、彼らは自分たちの決定や行動 について神に対する責任があります。

「おのおの個々人の魂は、もし生ける神の印を受けたいのであれば、主のみ言葉を聞き、それを正確に行わなければならない。もし人が神の家族の中に場所を占めたいのであれば、場当たり的な宗教などというものはあってはならない。」(信仰によってわたしは生きる 288)

46 ページの 続き

「生ける神の印は、品性がキリストのみかたちを帯びている者だけに押される。」(信仰によってわたしは生きる287)

引用参考文献

13章 印する働き (98~103)

った。いて次のような非常に深刻な言葉をもって警告しています。「なまけ者の欲望 は自分の身を殺す、これはその手を働かせないからである」(箴言 21:25)。

ある人々は、自分たちが他の人々より頭が良く、彼らにすべての重荷を 着わせることができると考えて、自分たちは一生懸命働く必要がないと自慢 しています。たいてい、多く話すこれらの人々は、たいしてかからないうちに、 その悪い品性がおのずと現れて、ついには友だちも人の尊敬も失います。

ですから、わたしたちはいつも、イエスを見ることを覚えていましょう。このお方は仕えてもらうため、つまり待つためではなく、仕えるためにこのもじょう。 このお方は他人でものです。このお方はほかの人のために働くことを恥とされませんでした一事実、それはこのお方の喜びでした。このお方は、「わたしの父は今に至るまで働いておられる。わたしも働くのである」と説明なさいました(ヨハネ 5:17)。

それを試してみると、多くの人は、私心なく他の人々のために働くことが、それ自身の方法において、夜の十分な睡眠よりもさらに活気づけるものであることを発見して驚きます。善を行うことは、非常に満足を与えます。ただことが、である利益のためではなく、他の人々を助けるためであればなおさらです。あなたも自分で試してみてはいかがでしょうか。そしてイエスの愛があなたのではなり、あなたに新しいエネルギーを与えるようにしてみてはいかがですか。結局、ぶらぶらしている人は、敗北者になるのです。

豆腐ローフ

〔材料〕4人分

玉ねぎ 2個(みじん切り)

オリーブ油大さじ2水大さじ2

豆腐 2丁(くずす)

 炊いた玄米
 3カップ

 豆乳
 1/2カップ

(3a) 1/2 カップ (きざむ)

 塩
 小さじ 1/2

 ガーリックパウダー
 小さじ 1/2

 オニオンパウダー
 大さじ 1

 昆布だし
 大さじ 1

イーストフレーク (調味料) 大さじ1 (省略可)

クミン 小さじ 1/8 しょうゆ 大さじ 2

〔作り方〕

- 1. 油と水で玉ねぎを炒めます。
- 2. 豆腐を洗い、水切りをし、つぶします。豆腐をボールに入れます。
- 3. 炒めた玉ねぎと他の材料を加えて、豆腐と良く混ぜます。
- 4. 油をしいたオーブン皿に入れて、180 度のオーブンで 30 \sim 35 分 焼きます。

※丸めて、コロッケのようにアレンジもできます。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校:9:30-10:45(公開放送)

礼拝説教:11:00-12:00(公開放送)

午後の聖書研究:14:00-15:00

【公開放送】http://www.4angels.jp



聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理

お申込先:〒350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱13号「福音の宝」係 是非お申し込み下さい。

書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全 に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



なま ぐせ どれい 怠け癖の奴隷

「手を動かすことを怠る者は貧しくなり、勤め働く者の手は富を得る。」 (箴言 10:4)

「しばらく転り、しばらくまどろみ、手をこまぬいて、またしばらく休む。それゆえ、 ${\stackrel{*}{\phi}}^{t}$ さは盗びとのようにあなたに ${\stackrel{*}{x}}^{t}$ り、 ${\stackrel{*}{\tilde{z}}}^{t}$ さは盗びとのようにあなたに ${\stackrel{*}{x}}^{t}$ り、 ${\stackrel{*}{\tilde{z}}}^{t}$ さは、つわもののようにあなたに ${\stackrel{*}{x}}^{t}$ る。」(箴言 $6:10,\ 11$)モファット版の聖書では、 ${\stackrel{*}{\tilde{c}}}^{t}$ ごすことについて、「すばやい旅人がゆっくり歩く者に追いつくように、貧しさがあなたに追いつく」とあります。

たしかに、みんな競争には勝ちたいですが、そうはいってもなの良いないがないがないがないですが、そうはいってもなの良いないがないだが、を回復するものは他にありません。あるいは、少なくとも、それは回復させるもの一わたしたちに新しい日のための力とエネルギーを与えるもの一であるべきです。そうであれば、なぜときには対しまさるのが、こんなにつらいのでしょうか?それは前の晩にどれくらい遅く寝たかによるかもしれませんし、あるいは寝床に着く前にどれくらいたくさん、あるいはどれほど遅くに少食をとったかによるかもしれません。しかし、その理由が何であれ、聖書はもしわたしたちが起きて活動する時間になってもぐずぐずしているときに何が起こるかを示しています。毎朝起きるのが遅い人は、ついには替じくなるのです。

しかし、それを信じるのは難じいですね?そうは言ってみても、アメリカのような国では、郵便受けに次々と、何もしないで無料の商品が山のようにして、そることを約束しています。新聞や雑誌では、しばしばどのようにして、住所録のために10ドルを送るだけで、たくさんのお金を稼ぐことができるかを得意げに宣伝しています。彼らは次に別の広告を載せ、だまされて自分たちに10ドル送るであろう人々の住所録を提供するのです。約束、約束、約束一すべてはお金を欲しくて欲しくて欲しくて仕方がないけれども、それを稼ぐために働きたくなくて働きたくなくて働きたくなくて仕方のない人たちをわなにかけるために仕組まれています。聖書は怠惰、つまり怠け癖につ